
窓の外

はまな

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓の外

【Nコード】

N9820K

【作者名】

はまな

【あらすじ】

北の町は婚約者の町、南の町は独り者の町、中心の町はそんなちらかを選択する町。

僕は古い友人とベランダで出会う。哀れなその友人と、一人超然としようともがく僕は、どこまでも淡泊な関係だが、それでも縁はある。

折り合いをつけて生きていくことの出来ない僕と彼女は、互いに自動的に生きていく。

窓の外

マンションは同型の物が二つ、少々斜めにずれてはいるが並んで建っている。初めて訪ねて来る客は僕の住む「カナビス？」と隣の「カナビス？」をよく間違える。南方向に？が建っているの、僕の部屋を含めて？の日当たりは？に比べやや悪い。そのお陰で家賃は数百円安い。

カナビスは、大学に上がったと同時に借りた初めての一人暮らしの場所であり、オートロックの共同玄関や鳥避けの柵がついたゴミ捨て場、ナンバーロック式のポストなど極めて利便性の高いマンションである。

ワンルームは味気ないという者もいるが、一人で暮らすということにおいて味なんてものがどこで要求されるのか、またそれは可能なことなのか、それは永遠の難題だと思う。

蛇口からは水もお湯も出るし、床はフローリングで、キッチントイレ風呂という必要な物が全て揃っている。余分な物も当然ある。百足分は入りそうな玄関脇の靴の収納は、唯一この部屋で邪魔だと思えるものだった。

ベランダもついている。洗濯物を外に干すのは面倒な上に、僕は夜までバイトをしているので取り込む機会が難しい。だからサボテンの小さな鉢を一つだけ置いて、半年に一度くらいしか利用しないスペースになっている。

家具はほとんど持っていない。パソコンを置くための小さな机が一つと、ベッド、それだけだ。本は雑誌も文庫も単行本もまとめて引越しのときに余ったダンボールに突っ込んでいるし、食事はキッチンで作りキッチンで食べる。

極めて見通しの良い部屋というわけだ。だから、すぐに気がつい

た。

「ここ、僕の部屋ですよ」

ベランダと部屋の中を繋ぐガラスサッシを軽く叩いて、告げた。この部屋には窓がない。サッシが一つあるだけだ。その向こう、ベランダに女が蹲っていた。

花柄の丈が長いワンピースの上にベージュのカーディガンのような物を羽織っている。ワンピースは濃い青色で、肩に紐で引っ掛けるだけの、首周りの露出が高い物だ。だからカーディガンを羽織っているのか、それとも肌寒いのか。

女はゆつくりと、死霊かりハビリ患者か池に広がる波紋かそういったものと張り合えるほどの緩慢さで振り向いて何も言わずに僕を見つめた。

その動作のゆったりした感じも、頼るようにつめる眼差しも、親を亡くしたひな鳥のような座り方にも、大体全部に少しばかり腹が立った。

「之博」

ゆきひろ、と彼女の口はそう動いた。声は小さかったが聞き逃さなかったし、僕は唇や舌がその形に動くのをもう数え切れないほどに見てきている。それは僕の名前だ。

もう一度、注意深くその女を見た。ひどい姿だと言わざるを得ない。いや、見た目が悪いわけではない、決して。

胸の辺りまで伸ばした髪はつややかで綺麗だったし、それは僕の好みでもある。太くも細すぎることなく、背が高いわけでもない。絶世の美女ではない。城も国も傾かないが、まあ美人だった。ただ、右の頬に青あざがついている。風呂場のカビのように細やかな肌を占領しようとしていた。それに、服だって人の家のベランダに忍び込むような格好とは言えない。めかしこんでいるという雰囲気がないのだ。

ああ、こいつ。

「僕は之博だけど、君はもしかしたら涼子か」

女は答えなかった。ただ、僕を見つめる目に何かが灯ったように感じた。

少しだけ開けていたベランダのサッシを全開にして、僕も外に出る。当然だが、僕が家にいるのは夜、それも九時以降のことだ。今日も近所の大型ショッピングモールで延々とパン粉や蕎麦やとろろ昆布やラー油やビスケットやシリアルや料理酒なんかを、多箇所販売かどうか気をつけながら補充してきたのだ。くたくただった。

手っ取り早く確認したほうが良い。女の顔に手を添えて、自分の顔を近づけた。

記憶と照合する。困難な作業だ。

「涼子だな、やっぱり」

「……はい」

「久しぶり」

「久しぶりです」

「どうして僕の家ベランダになんかいるんだい。こんな遅い時間に、もし泥棒だったら隣に行ってくれよ」

しばらく魚のように何度か口を開いて、声を出さずに閉じるという作業を繰り返してから涼子はポケットから鍵を取り落とすみたいにして「お願い、助けて」と呟いた。

迷惑だな、と感じた。

涼子はフルネームで島中涼子という。中学時代、僕が二年生のときに転校するまで同じクラスで、仲の良かった友達の一人だ。僕は彼女が好きだった。でもまあ、中学生のときのことだ。

冷蔵庫から紙パック入りの紅茶を取り出して、コップに注いでレンジで暖める。二つのカップを持って、ベランダに向かう。

ベランダの、灰色の壁を背もたれにして座る彼女に紅茶を手渡す。涼子は少し泣いていた。感情的になった人間は、温かい飲み物でいやすのがいいと、何かの本に書いてあった。

僕はベッドに腰掛け、しばらく紅茶に口をつけていた。一リットル

百円くらい、最底辺の紅茶は温めることでその憂鬱な風味が更にはつきりと感じられ、なんともいえない気分にはくをさせた。ただ、鎮静剤としては効果が高いかもしれないという、そういった味でもあった。

「私ね、近くに住んでるの」

「へえ」

それは考えれば凄い偶然かもしれない。僕が転校前に住んでいた街はここから車で三、四時間ほどかかる。

深く追求するほどのことじゃないけれど。

「之博がここに住んでいることも、何日か前に偶然分かったの。ここから出てくるのを見かけて」

開けっ放しのサッシから、涼しい風が流れ込んでくる。四月末になつても、時々寒い日がある。葉桜があるのに肌寒さを感じるのは、なんだか不条理な気がした。そういえば、あの人は葉桜が好きじゃないと言っていたっけ……。

「ごめんなさい、泥棒じゃないんです。私、家から逃げ出してきたの」

最初の位置に座ったままで、自分の膝の間を見つめるような格好で涼子は少しずつ話している。僕は涼子を家の中にはいれなかった。涼子も入りたいとは言わなかった。

「へえ、家から？」

「正確には、同居人から、かも」

同居人……考えずとも、まあ、男女の仲という奴なのだろう。とすれば、顔についた痣も納得がいく。納得がいくので、あえて訊くことはしなかった。

「どこにも当てがなくて、気がついたら」

「僕の家？ でも、ベランダはおかしいよね」

「……隠れながら、逃げてきたんです。それで、このベランダ、ほら、壁があつてしゃがめば外から見えないじゃないですか」

確かに、僕の部屋のベランダはそういう構造だ。だが往々にして

ベランダというのはそういうものでもあるだろう。何も壁がないベランダは危険すぎる。自ら牙は剥かないかもしれないが、油断して洗濯物を取り込む際に転んだりすれば、外へと真つ逆さまだ。幸いここは一階だけだ。一階じゃなかったら涼子もこんなところには忍び込まなかっただろう。

「ちよつと待つてて」

僕はそう言つて、キッチン下の収納から金属製の小さな箱を取り出した。綺麗に塗装された箱で、何処となく英国だとか、スイスだとか、そんな場所をイメージさせる箱だ。ただ、裏面にははつきりとメイドインジャパンの刻印がなされている。

蓋を開けてベランダとベッドの間に置いた。中身はクッキーだった。一月ほど前に職場で同僚からどこかの旅行のお土産に貰ったものだった。一人で焼き菓子なんて食べていると惨めさと冷たい怒りでどうにかなりそうなので放つておいたのだ。

「どうぞ」

薦めて、涼子が一つ食べると、僕も何となく食べてみた。柔らかく香ばしい。残念ながら僕はクッキーの違いなんて分からない。手作りかそうでないかが分かる程度で、あとは柔らかく香ばしい、というその感想しか持つことが出来ない。ただ、あの人が作ったクッキーだけは違う。ああ、くそ、雑念だ。

しばらく色々な話をした。考えてみれば僕と涼子は九年ぶりの再会だ。話すべきかどうかは抜きにしても積もる話はある。

彼女は最近この街に来たらしい。付き合いだした彼と住むために近くに部屋を借りて、今は同棲中だという。両親はとつくの昔に「北の町」に戻ったらしい。それはそうだ、誰の親だつて、子供が自立できるまで育てば「北の町」に戻る。皆それを望む。早い家では、中学卒業時に両親と別れることになる。

僕達は「中心の町」で、いずれ南にいくか北に行くかを選択しなきゃならない。勿論北から南に移る人は大勢いるし、その逆もごく少数ではあるが存在する。中心に戻ってくる人は少ない。皆、結ば

れることの安寧や別れたことの失意から逃れられないから、中心の町に戻ることはしないのだろう。それは、何となく分かる気がする。「で、その彼と、上手くいつてないんだね？」

「うん……」

当然かもしれない。上手くいつていれば北の町に行くことを選んでいるだろう。北の町は婚約者の町、夫婦の町、番になって暮らすことが保証され約束される町だ。

細かい話をいくつかして、少しだけ気力を取り戻したように見える涼子は最後に微笑んで、紅茶のカップを返してきた。

「その、本当に有難う」

「何もしてないよ」

「ただ、いさせてくれるだけでよかったの」

「帰るの？」

「……うん。そろそろ落ち着いてる頃だと思うから」

「気をつけて」

「あの」

何かを言いよどむ、その姿は、やっぱり頼りなかった。昔の彼女は今と似ているし、変わっている。知的であり大人しく、全体的にバランスが危うい。トランプで作ったタワーみたいな印象を受けるのだ。

「また、来てもいい？」

「僕は夜しかいないけど、それでいいなら」

その答えに、広がる綿みたいに彼女の顔は喜びに溢れた物になった。僕はそれを冷めた目で見ていた。

自動的に生きていることに自覚的になった人間にとって、人生というのは甘く長い拷問でしかなく、そのこと自体は既に慣れきってしまっただっていいのだが、だからといって疲れないわけではない。

大学に通いながらのバイトは控えめに言っても辛いことこの上な

い。仕事自体は単純で、体力と良識だけがあれば中学生だって立派にやり遂げられるに違いない。それほどに簡単な作業なのだ。

資金が要る。大学に通って生きているだけなら、僕は別に働く必要はないのだ。それくらいのお金は銀行にためてあるのだ。ただ、質素に生活していくのとは別に、何か大きなことをやろうとして、資金繰りにバイトをすることになった。

追いかけるのだ。決意と覚悟は、実は僕の中には一つもないのだろう。それが分かる辺り、僕はまだ正常者であるという保証を得ているということにもなる。在るのは運命性とか宿命性だけだろう。乾いた砂漠で蜥蜴が何かが水を求めて動くことはあっても、例えば太陽の強い光と共に大地に帰ろうだとか、熱を持ちすぎた地球に同情してむせび泣くことで脱水して死んでしまっただとか、そういったことが出来ないのと、僕があの人影を追いつけることしか出来ないことはよく似ている。

するしかないということは、それがどんなに辛くとも関係なくするしかないのだから、最終的にはあまり辛くも感じなくなる。

ということで、僕は涼子とであった翌日もその次の日も働いた。手を抜かず、真剣に仕事のことだけを考えながら働いた。

かつて世界には様々な職業があったそうだ。村上春樹に、プラネット・ダイバー、グリフォン、交換士、実弾会計士……それが、今ではシンプルなものだ。銀行員や教師や警官やパイロット、アイドルに歌手、そんな分かり易い仕事ばかりが残っている。

人にとつての分かり易い選択もまた、時を経ることにシンプルになっただけだった。

交際するか、しないか。婚約するか、しないか。そして、北に行くか南に行くか。

最初に再会してから四日。また、ベランダに小さな影を見つけた。今度はミルクココアを作った。味見してみると、あまり甘くはなかったが、風味はよく出ていた。つまみにホットケーキを焼いた。

ホットケーキミックスを買ってきてホットケーキを焼くのは、僕の数少ない趣味の一つだった。パッケージの写真のように、厚みを保ってふつくと仕上げる。知人に頼んで二月に一度ほど送ってもらっている蜂蜜を市販のシロップと混ぜてケーキの上から垂らし、ついでにクリームとチョコレート・シロップも添えた。

ココアと一緒に盆に載せ、ベランダに向かう。

「こんばんは」

「こんばんは」

彼女は前るときよりも憔悴しているようだった。僕がベランダを開けると、さっと左手を隠した。気になったので、ココアを手渡すふりをして腕を伸ばして、左手を掴んで引き寄せた。

「あ」

小さく洩らした声は、痛みのためか、それとも露見することに対しての物だったのか。左手の爪が中指と薬指の二枚、はがれかけていた。見るからに痛そうで、全く傷のない僕の指までじんじんと熱を持っているような錯覚に捉われる。

「痛そうだね」

「……ええ、実際、とても」

溜息をついて立ち上がり、僕はいつも使っている靴から消毒液と絆創膏を取り出した。彼女の手先を軽く消毒し、絆創膏は張るかどうか迷ったが、箱ごと渡すにとどめることにした。こんなことなら治療を終えてからケーキを作ればよかった。冷めてしまう。

それからようやくホットケーキを勧めた。

「ありがとう」

涼子は、誤魔化しようがなく泣き、静かに食べ始めた。彼女が泣いていることよりも、僕はケーキの味が気になった。不味いと言われたら立ち直れない自信があるのだ。

またこないだのように、開け放ったサッシを挟んで僕達は話す事になった。特に鬱陶しいとは感じなかった。大人数の人は苦手だが、こうして一対一で話す分には、相手を空気よりも軽く感じることだ

って出来る。喜びにも繋がらないが、別段苦痛でもない。

そう、苦痛ではないのだ。どんな煩わしさも、悪辣とした環境も、そこが例え硫黄と焰の占拠する宇宙の果てまでの三倍の距離を隔てた場所であろうと、僕は煩わしさを感じることもないだろう。僕はもう充分に不幸を獲得しており、そのためにそれ以上の煩わしさが入り込む余地はないのだ。人間たつた一つ、致命的な破綻があればそれだけで状態が固まってしまう物だ。僕の煩わしさはたつた一つ、ある人のいない場所で生きていることそのものだ。

彼女は、涼子は違うのだろう。好き合った相手との不和でこうもしおらしく泣ける人間は、哀れと共に救いのある状態に置かれている。だがやはり哀れである。

哀れというのはどうあっても非価値である。弱さで人を脅迫すること自体が悪なのだから、弱さとは価値になりえない。

「君の彼……その上手くいっていない相手は、どんな人だい？」

「ええと」

「いやだつたらいいんだけど」

「いえ、嫌じゃないけど、なんて言うのかな、お互い、縋ってしまっている感じなの」

「縋る？」

「最初はただ好き合った気がする。ただ、ずれはあつたし、絶対的ではないとも感じていた。それでも上手くいけばよかったんだけど」

「いってないね」

「でも、他に当てがないんでしょうね……私も彼も、互いに別れることだけはしていない」

「馬鹿馬鹿しいと思わない？」

「酷いこと、言いますね」

「気がついてないなら言っておいたほうが良いし、無駄に相手に合わせるの嫌いなんだ」

「そう……」

涼子は怒ってはいなかった。沼地に腰まで浸かったような疲労が

彼女を染め上げている。

「でも、独りで生きていくのって怖いじゃないですか」

「そんなことはない」

断言する。涼子の目を見て、僕は繰り返した。

「断じてそんなことはない」

「どうして」

「逆だよ。どうして、独りじゃいけないんだ」

「寂しいし、頼れないし、それじゃ生きることには耐えられないよ」

僕は嘆息した。少々攻撃的な嘆息になってしまっただろうか。仕方がない。

「それで、埋め合うために付き合って、どうなるって？ 同じく欠けた人間同士仲良しこよしやって、何が埋まるんだい。寂しい寂しいと叫ぶもの同士集まったって、そもそも独りで充溢できない人間だけじゃ結局寂しいままさ。寂しさが集まったところで一時のごまかし以上にはなり得ない。だって皆寂しい人間で、他人を埋め合わせるに使うと考える奴同士で、どうやって充足するんだ。一に満たない数同士掛け合わせても小数にしかないよ」

「掛け算じゃ無しに足し算だとしたら？」

「寂しい色の数字が膨れ上がるだけさ」

部屋の近くの道路の街灯が瞬いて、一つ消えた。

「独りで生きていける人間だからこそ、他者と触れ合う意味がある…… 他人を出汁に生きたりしない人間だからこそ、他人と生きていく価値が出来る上がる」

「それはあなたの人生論？」

「絶対に違う。何の人生論でもない。ただの論理的帰結だ」

「きびしいんですね」

「そうでもないよ。独りで生きていける人は、君みたいな状況には陥らない。過ちがあれば認めて別れるし、それによって人生が損なわれることもない。便利だよ」

「あなたも、そうなんですか？ 独りで生きていける人？」

「ああ……ただ、僕の場合は特殊かもしれない。独りで充分生きていけるけど、その目的としてある人を追いつけなければいけない」「依存している？」

「していない。ただ、息するみたいなものさ」

呼吸が呪いであるように。胃の収縮や皮膚の代謝、脳の電位の移り変わりや血液の循環も呪いだ。望むと望まざるとに関わらず生きている限り手放せない、つまりは呪いだ。

三日後、僕は駅近くの知らないマンションの前にいた。心なしか全身が緊張していて、息苦しさを感じる。それを表に出さないままに、マンションの共同玄関に取り付けられた郵便ポストに近寄る。部屋の番号が振られた色気のない小型ロッカーのようなポストがずらりと並んでいる。

無言で203の箱に手を伸ばす。取り出し口には小さな鍵がかかっている。ナンバー式のもので、スロットのリールのような円筒にゼロから13までの数字が振られた物が五桁分ある。予めメールで教えられていた番号でそれはあっさりと開いた。

一瞬、中身が入っていないのではないかという根拠のない想像が頭の中を満たした。面倒な手順をいくつも踏み、大金を出してここまで来たのだが、これで中身が空ではないという保証などないのだ。ここはサービスセンターやクレーム用の窓口が設置されたショッピングセンターではないし、僕が購入した物もケーキや自転車などではない。

白い紙に包まれた一抱えほどの物体が見つかった。他には何も入っていない。素早く取り出すと、その包みは見た目よりも重く感じられた。昔の、取り回しの悪い大きな携帯ゲーム機くらいの重さだった。多分、中身はちゃんとしたものだろう。安堵して、誰かに見つかる前に鞆に放り込みその場を後にする。

ここまで、誰かにばれたり捕まったりしなかった。やり遂げた達成感と見えない疲労が肩にのしかかった。メールのやり取りは通常

記録が残ってしまうが、僕が送受信していた相手は北の町と南の町とこの中心の町のネットを複雑に経由してメールを送っている。町と町の間のネットは繋がってはいるものの通常民間人が利用は出来ない構造で、その間を通り抜ける際に信号は暗号化される。町と町が認めた場合にのみ使われる暗号化は二つの町を結ぶ物で、三つ以上町の境目を越えたメールはみつつの町が共同で解析しない限り読むことは出来ない。

僕にこの包みを売ってくれた人間がそういったことに長けた人間で助かった。多分悪人だろうけど、感謝はしておいた。

慎重にならねばならない。今までこうしたものには触れたことがなかったのだ。しかも、買ったのは新品か中古品かも分からない怪しい品だ。まともに作動してくれることはまあ、信じているが、危険な物には変わりない。所持していることが露見すれば犯罪者、使用にしくじれば大怪我だろう。

落ち着く自宅の机の上、キーボードをどかして、包みを置く。

真っ白い紙で包まれたそれは改めて見ると中々に不気味だった。

手をかけて、包み紙を破る。

大体予想通りのものが出てきた。黒いつや消し仕上げ。グリップは細いが、ダブルカラムのマガジンには最大で十七発の弾丸をこめることが出来る。拳銃と聞いて人が想像するイメージからは少し細身に思えるかもしれない。半自動式のためにシリンドラーではなくスライドが設けられており、その側面に小さく字が彫られている。

「myrtle」

声に出して読んで、そのセンスのなさに苦笑する。売人は高品質の銃器をそれなりの値段で提供するとメールで何度も言っていた。

確かに上物だろう。あまり銃には詳しくなかったが、見た感じ粗悪品ではない。ただ、新品でもない。Myrtle——天人花だっけ？

前の持ち主はこの銃を何のために使っていたのだろうか。花の名前の通り、結婚式なんかに持っていったのだろうか。よほど気に入

らない縁談だったのだろう……。

紙袋には他に弾丸が百発ほど、ダンボール紙にくるまれて入っていた。予備マガジンも三つほど。それと、マニュアルらしき紙。これはしっかりとしたメーカー製のものではなく、コピー用紙にプリントされたものだ。シンプルに銃の構造と取り扱いに関しての最低限の手順だけが書かれている。一番下に、強装弾対応、と朱書きされていた。

迷わずマガジンを取り外し、弾丸を詰めた。手に馴染ませるように、持ったまま握ったり離したりを繰り返していると、突然ベランダに何かが飛び込んできた。

映画の見すぎかもしれない。咄嗟に振り向いて、それと共にアクション・ヒーローさながらに銃を向けていた。

涼子が両手を上げて固まった。

「それ、モデルガン？」

「いや、実銃」

「ええ？」

僕は銃に集中しているふりをしながら、涼子の方を窺った。目元に浅い痣がある。見たところ、殴られるのを避けたために中途半端に掠ってしまったといったところか。なんと言おうべきか——彼女はそういった目元の傷が似合う顔であるようにも思えた。失礼極まりない話なのだが、しかし嗜虐趣味のある人間ならば彼女の顔を見て分かるはずだ。

僕にその気はない。が、嗜虐的状況は多く体験してきたようにも思う。そういった慣れが僕に彼女を見た際そんなことを思い浮かべさせる要因なのだろう。

「何でそんなもの持つてるんですか？」

「必要だったからね」

「銃が？」

「武器がさ」

「物騒ですね」

「そう。物騒な話なんだよ」

パチン、と軽い音と共にロックをかけて、銃を机に置く。

しばらく、僕は部屋の中に立ったまま、ベランダに立つ彼女を見つめた。言葉をかけることも、吐息を交わすこともなく……。

夜気に晒されて冷えた彼女の肌や髪は、例えようもなく魅力的だった。涼子は独りで生きることが出来ないさもしい人間かもしれない。だが、人類のほとんどはそういった人間であり、特別彼女が劣っているなどとは言えない。

いやむしろ。

人類のほとんどが、特別劣っているのではないか。いつまでも空虚な自己を埋めきれず、耐えられず、人を求め、恋人を作り家庭を持ち子を成していく……。生まれてきた子供は、親からその構造を教えられることはない。教育なき環境でまたも空虚を抱えて一人の人間が彷徨い始める……。

僕は、たいした人物ではない。偉業を成し遂げもしないだろうし、まともな一生を送ることもないだろう。自分の家のベランダで髪を揺らし立ち尽くす涼子は、どうだろうか。

ふと、何か欲が沸いてくる。僕はベランダに出た。

「之博君？」

これまで僕達を隔てていたサッシを乗り越えたことに、涼子は驚いたようだった。之博君、だって？ 中学のときはそういえば君付けだったっけか。もうそんな、初心な歳じゃないのに。

「僕は――」

近くで、改めてよく見れば昔の面影が多く残っている。ただ、決定的に僕達は歳を取った。数年間会わないだけで人と人の間の縁はねじれるし切れもする。それはどう変化しようとももとの位置には戻らない。

「もうすぐここを出て行く」

「部屋を？」

「部屋も、町も。北の町へ行く」

*

何度もそのことを考えた。何度だって考える。

川を橋から見下ろして、薄い雲の向こうから差し込む錆び色の朝日を受けて秋の終わりのような重苦しさを湛えた水面に魚が背中を晒すのを見つける。そこで、彼女は言うのだ。

「私、彼と結婚することになったの」

僕は

ただずっと川を眺めていた。落ち葉がぎっしりと詰まった小さな中州や、鳥の死骸、何処からか流れてくる小さな靴。

僕達は中心の町で生まれる。そこで選択しなきゃならない。伴侶を見つけるか、独りで生きることを選択するか。前者ならば寄り添う人との関係を深めた上で国に申請をし、北の町へと移住する。北の町は夫婦の町であり、二人で暮らす人間にとって様々な補助がなされる。本人達以外の意思でその仲を邪魔することは堅く禁じられ、どんな権力も恋仲に介入することが許されていない。それが約束された場所だ。

南の町はその逆で、独りで生きてくことを条件に居住が許される。そこでは社会性の悪夢——社会という大衆が抱える愚かさや煩わしさから最大限住人は保護され、孤独にさえ耐えられるならば清冽に健やかに生きていくことが出来る。

政府は少人数で作られ街には住むことなく、全ての町のシステムを支える。だからこそ南の町は社会性が破綻しているにもかかわらず社会としての利便性は失われない。

僕は隣で僕と同じように川面へ視線を向けている少女と旧知の仲であり、そして加えて言えばどうしようもなく彼女に焦がれていた。それは自動的で宿命的で、理由もなければ変える事も出来ない想いだった。この世にはそういったものを抱えて生きている人間がいる

のだ。一部の天才が何か取り付かれたように、「それをするしかなく」生きていかなければならないように。善いも悪いもない。善い悪いという構造の存在性そのものが既にして善悪を超えているように、本当に一部の人間の宿命や運命といった物は、ただそうあるだけで、善悪の彼岸の物としてしか語ることが出来ない。いや、善悪の彼岸にあるという正にそのことにおいて、ろくに語ることなど出来ないのだ……。

「言うのが遅くなって、ごめんね」

「謝ることじゃない」

反射的に擁護してしまう。そう言ったミスが積み重なった結果がこれなのかもしれないと思うと一層気分が沈んだ。

「変なこと言うかもしれないけど、聞いてくれる？」

粒の細かい砂糖のような彼女の声は、耳の穴からさらさらと僕の体に入り込んでくる。彼女の声だけは瞬時に思い浮かべることが出来る。その姿形と共ににはつきりと覚えているものの数少ない一つだ。

「ああ、何？」

「これは、私の勘違いかもしれないけど、君は私の事を好いてくれている気がする」

「……………」

ぎざぎざの刃を持つアーミーナイフを腹に刺された上に捻られたらこういう気分になることだろう。血の気が引いて吐き気がした。

「当たってるよ」

「……………なら、今日は本当にごめん」

「謝ることじゃないさ」

「ね、君がもし私をどうしようもなく好きなら」

もし、なら。もし僕が彼女と共に北の町に行くことになっていれば。もし彼女が彼と出会わなければ。

「私は今の彼が好きだけど、それと同じように私が好きなら、そのために何をしたいといいと思う。勿論私にとってそれは迷惑な物になるかもしれないけど、君にとって切実なことのために何かするな

ら、私はそれを拒絶しないし否定しない」

「そう……ありがたいね」

「もし君がこの街か南の町で一生暮らすなら、私達、今日でお別れだね」

喉の奥が詰まって、上手く声を出すことが出来そうになかった。

ぐらぐらと視界も揺れている。言葉の境界、物の判別加減がいい加減になっていく……。

「さよなら、之博」

*

「それじゃあ、その人を追って、北の町に？」

「そうだよ」

数年間で失意と共に暮らし、それでも彼女に対する感情はなくなつてはくれなかった。焦燥感と虚無感が交替交替に襲ってくる日々
に耐え切れなくなった頃、決意した。

「でも、北の町は結婚前提のカップルしか入れないんじゃない？

之博は誰かと付き合っているの？」

「まさか」

自嘲気味に笑う。一人だけ交際したことがあるが、一週間保たなかった。

町と町を隔てる壁は厚い。実際に分厚い壁は存在するし、比喩的な意味でも、充実した警備は軍隊と見まごうほどで、許可を得ていないものが越境することは酷く険しい道である。

そのための準備が拳銃でありバイトでの資金集めである。

「でも、じゃあ、そっか。お別れなんだ」

努めて明るく、と言った所か。涼子の暗い口調には気がついたが、僕は特に何をしてやることも出来ないだろう。

「私も、あなたみたいにはつきり決めて行動できればいいのに」

「僕みたいに？」

「ええ。人と別れることも再会することも、普通躊躇ってしまふ事だから――それでみんな、煩わしさを抱えるんだけど」

「僕は何も決められてなんかいないよ。出来ることをやってるだけで、しかもその出来ることが凄く限られてるんだ。目の前の引力に引かれてるだけで、余裕、無いんだ」

「之博君が？　ちょっと信じられないよ」
「どうして」

「あなたは、一人超然としているように感じる。だってそうでしょう？　片思い相手、しかも婚約している人を追って何かしようだなんて」

「おかしいかな」

「普通だとは思わない」

「そう……」

このまま一人残していけば、涼子は交際相手の暴力に晒され続けるだろう。だが別れることにも難色を見せている。端的に言えば、さもない女だ。だけど、さして悪い人間ではないのだ。素朴で、綺麗で、それだけの人物なのだ。世の中には独りで生きていけない人間が溢れているけど、それだからといってそのすべてが救いような奴らだとはいえないだろう。彼らだって、分かるはずだ。南の町を選択できる人間だけが、北の町を選択することに価値を持たせることが出来る！

「涼子」

決心して、僕は声をかけた。悪趣味と言ってこれほど悪趣味なことはないし、どうにも善意の行動とはならないが、それでも見捨てることはないのだ。

都合がいい。そう、都合の問題だ。

「僕と結婚しよう」

涼子は素っ頓狂な声を上げることとも口をあけることもなく、ただ無表情のまま驚いていた。

何のことはない——偶然と言っても、必然的要素は必ず抽出される物だ。

涼子が交際相手と共に暮らしているのは、「カナビス？」だった。僕の部屋が分かったのも、頷ける。

ドアの鍵を開けて、乱暴に開くと共に右手に持った「天人花」のスライドを引き、室内に向かって歩きながら銃口を前へと真っ直ぐ向ける。

テレビの前に座り込んでいた男が、呆氣に取られた表情でこちらを向いた。

構わず引き金を引く。

セミオートマティック拳銃は、立て続けに弾を発射することが出来る。リボルバーを社会からその大部分で押しのけた画期的な機構の自動拳銃は、その攻撃性とは裏腹にどこかコミカルなものを連想させた。次々に引き金を引くと、それに応じて次々に弾が発射され、その反動で次の弾丸がセットされスライドが往復しハンマーが持ち上がる。玩具の兵隊が女王の命令か何かで一斉に行進しているようだ。

最初に薄型の大きなテレビが弾けとんだ。次に壁のポスター、ピアノデスクが無茶苦茶に破壊される。マガジンの弾を数えながら発射し、手際よく交換する。家で何度も練習した成果が、隣のマンションの一室で発揮されていた。

ぎゃあ、とかひい、とか色々な声を上げる男を無視して、とにかく淡々と部屋のあちこちに弾をばら撒く。事前に涼子の大事な物は非難させてある。遠慮無しに暴虐の限りを尽くすことができるというわけだ。

しばらくして——あらかた破壊活動と呼べるものが終わった。フロアリングは穴だらけで着弾の衝撃によって捲れ上がり、なぎ倒された電化製品から火花が散っている。

男は引き攣ったように短い呼吸を繰り返していた。僕が近づいてやると、悲鳴を上げて両腕を顔の前で交差させて自らを庇うような

ポーズをとる。

僕は銃を振り上げた。男が絶叫した。そのまま殴りつけると、男はあっさりと昏倒してしまった。それほど強く殴ったわけではない。だが男はよほど恐ろしかったのか、小刻みに痙攣し、泡立ったつばを吐きながら白目を剥いている。

「どうかな」

振り返って声をかける。玄関の脇から涼子が姿を現した。

「めちゃくちゃですね」

「こいつが君の別れられなかった彼氏だろう?」

「ええ」

「どうかな」

しばらく涼子はその哀れな男を観察した。しゃがみこんでじっと見つめていること数分間、すっと立ち上がって彼女は苦笑した。

「変ですね。こんなにみすばらしい人には思えてなかったのに」

「まだ執着があるかい?」

「いいえ。あなたと結婚する」

「じゃあ北に向かおう」

「ええ」

当初、僕は北の町へと越境するために正式とはいえない方法を取ろうと考えていた。そのためにはお金が必要だったし、拳銃だっているだろうと考えていた。強行策に出ることも考えていたのだ。

だから、涼子はうってつけだったのだ。ぼくはこれで、夫婦として何恥じることなく、堂々と北の町にいける。そこで、あの人に会うのだ。恋の成就のために。もはや、不謹慎なこととそうでないことなどというカテゴリーが、床に散らばったテレビのパーツのように細かでもうでもいい存在だ。

僕の持ち物は少ない。涼子は数着分の服と化粧道具、僕は拳銃と涼子とベランダにおいていたサボテンの鉢植えだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9820k/>

窓の外

2010年10月8日14時02分発行